

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381024

研究課題名(和文) シュトゥットガルトにおける芸術アカデミー改革とヘルツェル学派の改革的伝統

研究課題名(英文) Reformation of Art Academy in Stuttgart and reformatory Tradition of A. Hoelzel's School there

研究代表者

鈴木 幹雄 (SUZUKI, MIKIO)

神戸大学・人間発達環境学研究所・教授

研究者番号：70163003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：従来わが国では、当該テーマに関する研究関心がバウハウスに集中し、アカデミー改革の視点が、旧プロイセン邦以外の地域に住む人々による芸術アカデミー改革努力と文化的胎動という関心にまで及ばなかった。

本研究ではそこで、南西ドイツのシュトゥットガルトの[芸術]アカデミーに位置するA・ヘルツェル、並びにヘルツェル門下に位置する一連の中心的芸術家・芸術学校教授達を取り上げ、シュトゥットガルトにおいて、ヘルツェル学派の改革的伝統がいかなる端緒から形作られたのか、この点を研究しようと挑戦し、本論テーマに関わる一連の研究成果を得ることが可能となった。

研究成果の概要(英文)：For long years in Japan, people found German Academy-Reform mainly in the context of Bauhaus, and didn't grasp it as the reformation of art academies in various context in Germany.

In our research project 2013/4-2016/7, therefore, we tried to research into the reformatory streams in the Academy of Art in Stuttgart and the school of Adolf Hoelzel there. At the beginning of 20th century, Prof. Hoelzel planted his reformatory concept for artistic expression and and taught new artistic education in its Academy. In our research, we tried to research into the matter how reformatory tradition was realized and from what seed of the Academy its tradition was developed.

研究分野：教育哲学

キーワード：芸術アカデミー改革 シュトゥットガルト アドルフ・ヘルツェル ヘルツェル学派 改革的伝統 南西ドイツ 亡命者文学の伝統 ヨーロッパ精神

1. 研究開始当初の背景

1) ドイツにおける改革芸術学校バウハウスは、1919年のワイマール設立以後、デッサウ、ベルリンに移転し、1920年代の政治的状況故に短命を余儀なくされたが、伝統的な芸術アカデミー・芸術学校に構想できなかった新しい時代の造形表現観とインターナショナルな芸術教育のスタイルを確立した。

これまでわが国の場合、芸術アカデミー改革の研究は、バウハウスを中心とすることによってその成果をあげてきた。しかし同事情もあり、とかくバウハウスの設立理念を手掛かりに戦後ドイツや戦中アメリカの芸術アカデミー改革の歴史と意味を考える習性が見られ、人々の関心が、20世紀の遺産である同改革の様々な伝統や蓄積をトータルに、そしてまた統合的に解明しようとする挑戦に向けられてこなかった。

2) 他方本研究の主要課題となる、バーデン=ヴュルテンベルク邦の邦都(州都)シュトゥットガルトのアカデミーでは、20世紀初頭、ドイツ人油彩画教授アドルフ・ヘルツェル(1853-1934)によって、同時代のフランス芸術表現の研究を手掛かりとして、造形表現上の抽象コンポジションが模索された。同門下では、ナチズム崩壊後のシュトゥットガルト・アカデミーで若い世代に新しい時代の造形表現を指導したヴィリィ・パウマイスター、更にはバウハウス「予備コース」の基本路線を基礎づけたヨハネス・イッテン、芸術家オスカー・シュレンマー等が育てられた。

3) ちなみにパウマイスターはその芸術的力量と並んで、ナチズム時代に「道徳的孤独」の姿勢を貫いたこともあり、戦後独仏知識人により好感をもって評価された。偏狭性を乗り越え、ドイツ語圏固有の開かれたヨーロッパ精神を育もうとするパウマイスターの姿勢は、ヘルツェル教授によって種をまかれ、シュトゥットガルトで培われた改革的精神の伝統とも言えるものであった。同伝統はJ・イッテン、O・シュレンマーにも受け継がれ、南西ドイツ圏のアカデミー改革思潮の重要潮流として注目に値するものとなっている。本研究では、以上の事情を踏まえて、本研究課題テーマに挑戦した。

2. 研究の目的

1) 目的：ドイツにおける改革芸術学校バウハウスは、新しい時代の造形表現観(理論)とインターナショナルな芸術教育のスタイルを確立した。だがこれまでわが国では、上述のようにアカデミー改革の視点がバウハウスを中心としたものに限られ、旧プロイセン邦以外の地域に住む人々による芸術アカデミー改革努力、そしてそれらがバウハウス自体に及ぼした影響という関心にまで及ばなかった。

他方フランス、スイスと国境を接する南西ドイツの邦都、シュトゥットガルトの[芸術]

アカデミーでは、ミュンヘン芸術アカデミー出身のドイツ人油彩画教授アドルフ・ヘルツェルによって、造形芸術上の偏狭性を乗り越え、ドイツ語圏固有の開かれたヨーロッパの精神を育もうとする芸術家達が育てられた。これまでこの点は、わが国では全く解明されてこなかった。

そこで本研究では、ヘルツェル、並びにヘルツェル学派の中心的芸術家・芸術学校教授達を取り上げ、シュトゥットガルトにおいて、ヘルツェル学派の改革的伝統がいかなる端緒から形作られたのか、また芸術アカデミー改革のコンセプトがどのように構想されたのか、この点を解明しようとした。

2) 具体的研究課題：

上記事実は当のドイツでは、2011年のシュトゥットガルト美術館主催の展覧会「芸術は一つの学問 ヘルツェル、パウマイスター、シュトゥットガルト・アカデミー」で、主要テーマに据えられた。この展覧会は同アカデミー改革史研究の進展に支えられて実現したものであった。同展は、近代造形表現としてのフランス美術に取組み、1910年代にはシュトゥットガルト[芸術]アカデミーの校長となる、ヘルツェル教授と同弟子W・パウマイスターを主要モチーフに、20世紀初頭南西ドイツの芸術アカデミー改革の系譜を浮かび上げさせようとした試みであった。

そこで本研究では、改革芸術学校バウハウスによってもたらされた芸術アカデミーの改革的「衝撃」の波及効果を視野に入れ、ヘルツェル学派を中心に、国際的精神を抱えた芸術潮流と伝統がどのように生まれ、いかなる伝統が創られていったのか、この点をヘルツェル、パウマイスター、イッテン、シュレンマーを事例に解明しようとした。

3. 研究の方法

1) 研究のモチーフ：本研究では研究目的を達成する為に次のモチーフを取り上げた。シュトゥットガルトにおける芸術アカデミー改革とヘルツェル、並びにヘルツェル学派(担当：鈴木幹雄)、オスカー・シュレンマーにみる造形芸術と芸術教育の改革コンセプト(担当：長谷川哲哉(研究協力者-和歌山大学名誉教授))、南西ドイツにみる亡命者文学の伝統と同地域にみる開かれたヨーロッパ精神(担当：清水光二)。

2) 研究アプローチ：

基本的方法：本研究では、当該モチーフに関し、海外文献調査・研究を行うと同時に、既に入手した専門的知識を基に国内で研究・分析を行う形で調査・研究が進められた。

3) 各分担者の具体的な役割：各分担者の各年度毎の役割は以下の通り。

平成25年度の研究・方法：

A. 海外文献調査・研究：シュトゥットガルトにおける芸術アカデミー改革の伝統とヘルツェルの芸術的・芸術教育学的展開(調査地域：シュトゥットガルト) 担当：鈴木。

B.文献に基づいた分析・研究： 共通テーマ：シュトゥットガルトにおける芸術アカデミー改革とヘルツェル学派[の伝統]、担当：同上。 テーマ「ヘルツェルにみる造形芸術観と芸術アカデミー改革コンセプト」、担当：同上。 テーマ「ヘルツェル・シューラー概況予備調査」、担当：同上。 テーマ「オスカー・シュレンマーにみる造形芸術と芸術教育の改革コンセプト」、担当：長谷川。 テーマ「南西ドイツにみる精神的伝統と同地域にみる開かれたヨーロッパ精神関連ドイツ語圏先行研究の調査」、担当：清水。

平成 26 年度の研究・方法：

A. 海外文献調査・研究： テーマ「オスカー・シュレンマーにみる造形芸術理論と改革コンセプトに関するドイツ語圏先行研究の調査」(調査地域：シュトゥットガルト、ベルリン)、担当：長谷川。 テーマ「南西ドイツの亡命者文学の伝統と同地域にみる開かれたヨーロッパ精神関連先行研究の調査」(調査地域：バーデン・ヴュルテンベルク州、カーススルーエ文学協会)、担当：清水。 B.文献に基づいた分析・研究： 共通テーマ：ヘルツェル学派の伝統と改革的コンセプト、担当：鈴木。 テーマ「ヘルツェル学派にみる芸術アカデミー改革コンセプト」、担当：同上。 テーマ「オスカー・シュレンマーにみる造形芸術理論上の改革的コンセプト」、担当：長谷川。 テーマ「南西ドイツにみる亡命者文学の伝統と同地域にみる開かれたヨーロッパ精神」、担当：清水。

平成 27-28 年度の研究・方法：

同年度には、前年度迄の調査・研究で入手した専門的知識を基に、研究を統合化した。文献に基づいた分析・研究を深め、研究の統合・構築の上で、研究上弱い部分を補強し、統合した。また、研究代表者がドイツへ赴き、バウマイスター・アルヒーフ管理者ハトヴィツヒ・ゲーツ氏の助言・指導を得た。

4. 研究成果

本共同研究を通して、以下の研究成果を得ることが可能となった。 アドルフ・ヘルツェルとアカデミーの内的改革コンセプト端緒の形成に関する研究成果、 ヘルツェル学派の改革的精神と改革的伝統に関する研究成果、 南西ドイツ文学にみる国際的精神の諸潮流についての研究成果。

詳細は以下の通り。

＜A・ヘルツェルとアカデミーの内的改革コンセプト端緒形成＞に関する研究：

論文、鈴木幹雄「シュトゥットガルト芸術アカデミーにおける改革的伝統と改革的精神の射程(副題-略)」(H25-26 年度研究成果)：

[概要] 1)本研究では、シュトゥットガルト芸術アカデミー教授ヘルツェルを中心に、改革的精神に支えられた芸術潮流の端緒がいかに育まれていったのか、考察した。

同芸術アカデミーでは、19世紀から20世紀初頭にかけて、ドイツ人油彩画教授アドル

フ・ヘルツェルによって、造形表現上の抽象コンポジションが模索され、同門下では、バウハウス「予備コース」の基本路線を基礎づけたヨハネス・イッテン、ナチズム崩壊後のシュトゥットガルト・アカデミーで若い世代に新しい時代の造形表現を指導したヴィリィ・バウマイスター、更には芸術家オスカー・シュレンマーが育てられた。

ヘルツェルは、同アカデミー校長となる古典的な意味での芸術アカデミー教授でもあったが、同時に20世紀初頭芸術アカデミーの改革に貢献した教授でもあった。しかし彼の造形表現観、並びに造形表現研究は、必ずしもはっきりとした輪郭に結晶化されていなかった為、この点は長い間理解されてこなかった。

2)1905年から1910年頃にかけてなされる、ヘルツェルの抽象コンポジションの探求の道は、1910年代にも追求された。彼が1900年以降記録した数々のエスキースは、手の動きを使ってなされた探求であった。このエチュードの研究を通して、彼はオリジナルな表現形式を模索する。それは、「造形的思考」研究の始動であった。

イッテンの芸術教育学的基礎づけ 1910年代初頭、ヘルツェルに手ほどきを受け、自らの芸術教育観を模索していったイッテンは、約二十年後の1920-30年代の教授職時代・校長職時代に、自らの芸術教育学の一連の輪郭を創り上げた。

文献上彼の造形芸術観・芸術教育学の結晶点を見せてくれるのは、1930年にイッテン・シューレから出版されたイッテンの日記である。そしてこの糸口は、後の書籍『色彩の理論』等に受け継がれる。

イッテン初期著作の分析から次の事が明らかになる。要するに、彼の造形的作曲法の思想とは、個々人の制作体験、空間の発生体験を積み上げることにより、造形的作曲法の体験的理解を築き上げ、自己探求的な教育を目標とした教育プロセスを作り上げる、というものであった。

3)バウマイスターは、1949年に講義用に作成された教授図版において一連の造形表現上の視点とカテゴリーを提示した。

それら視点を簡潔に整理するならば、次のように構造化することができる。

探求プロセス カテゴリー 制作・表現端緒 カテゴリー 関係性を手掛かりとした展開 カテゴリー 変調と空間の構築性(制作・表現端緒から、関係性を手掛かりとした展開局面を経て、変調と空間の構築性を創り上げていく、実験的・自己探求的なプロセス)。ここに、J・イッテンが1930年前後に発見した造形表現観を併置する時、そこにバウマイスターの発想構造との親近性を見ることができる。

4)この親近性とは、どのようなものであったのだろうか。手掛かりは、独仏芸術交流史研究者の研究によって提出された。ライブツヒ大学の教授、M・シーダ は、「ヴ

イリイ・パウマイスター 内的亡命から芸術的自己責任へ」で、パウマイスターが戦後ドイツに果たした芸術学的・芸術教育学的貢献について独仏双方から考察することによって、次の事を明らかにしている。パウマイスターはシュトゥットガルト・アカデミー教授として、造形芸術上の近代と関係をもたない若い世代を、彼らの知らないフランス芸術に導くことに格別な責任を感じていた。「彼が担当したクラスは、ドイツにおいて抽象で彩画する唯一の(数少ない 筆者) クラスであったので、常に多くの学生が彼の下で学ぶ事を望んだ。...彼らは単に、多くの点でセザンヌを抛り所とした、パウマイスターの造形基礎論から学んだばかりでなく、パウマイスターはまた、学生達に...造形芸術の近代...を体系的に理解させた」、と。

論文、鈴木幹雄「アドルフ・ヘルツェルとアカデミーの内的改革コンセプト端緒の形成」(H27 年度研究成果)

[概要] 1) ヘルツェル教授の造形表現上の模索とヘルツェル学派にみる改革的伝統と改革的精神の射程について研究した際、彼等の研究視点にみられた「造形的思考」の明示的水脈と地下水脈とを指摘しながらも、20世紀前半ドイツにおけるヘルツェルと同クライスの造形表現上、芸術アカデミー上の開花の原動力となったものは何か、が未解明点として残された。

そこで本研究では、上記研究で取り上げられたK・マウアーの研究書(2003)を再解釈し、同課題を解明することから始められた。その際次のプロセスを解き明かした点に、マウアー、世界トップ水準のヘルツェル研究があった。ヘルツェルは、1910年前後を分岐点としてそれ以前と以後では変化がみられた。当初19世紀末の近代油彩画家の仕事から始まりながらも、1910年前後の抽象油彩画家としての飛躍、コラージュ作家、ステンドグラス作家としての仕事を通して、音楽的力動性、空間的力動性、空間的構築性という視点に基づいた造形表現者へと転換・飛躍していった。そして彼は、同飛躍を通して、シュトゥットガルト・アカデミーの内的改革コンセプトの端緒を形成していった。

本論では、ヘルツェルが抽象油彩画を経由してコラージュ作家、ステンドグラス作家としての斬新な作品諸業績へと展開する経緯に光をあて本論の課題を解明した。

2) 1910年代初頭ヘルツェルは、聖書をモチーフにしたコラージュ作品を制作したが、このテクニクの導入は自らの授業に様々な材料を挑戦的に用いようとする自身の実験から生じたものであった。またヘルツェルは、フーガの作品制作において、造形表現がポリフォニー的な構文テクニクに見られる、様々な音域やイメージ地平によって豊かに分化されていくことを明らかにした。

その後ヘルツェルはパールセン企業からステンドグラス制作依頼を受けた。彼は、色

彩の表現をより一層集中化させ、第1次世界大戦直後にはその作品を、色鮮やかなステンドグラスに発展させた。この仕事の起源は、1914年のケルンで開かれたドイツ工作連盟展覧会において、ブルーノ・タウトから受けた、ガラス・ハウスの製作協力の仕事にあった。そして対象物を排除することによって、色彩の光の効果を保護するというヘルツェルの意図は、スケールの大きなコンポジションへ展開する発想法とアカデミー改革への「鍵」を開いた。

論文、鈴木幹雄「ヘルツェル学派の改革的精神と改革的伝統」に関する研究:

論文、鈴木幹雄「シュトゥットガルト芸術アカデミーにおける改革的伝統と改革的精神の射程(副題-略)」(前掲に付、概要略)

著書、鈴木幹雄「内的・外的亡命ドイツ人芸術大学長達は戦後芸術大学に何を託したか(副題-略)」(H26 年度研究成果)

[概要] 1) 本研究では、)A・ヘルツェルを事例としてシュトゥットガルト芸術アカデミーにおける改革的教室の誕生について研究し、)J・イッテン、ヴィリイ・パウマイスターを事例に同アカデミーに見られる改革的精神地下水脈の系譜を概観した後、最後にシュトゥットガルト芸術アカデミー、ベルリン造形芸術大学、並びにシカゴの改革的芸術大学ニュー・パウハウスを同時代事例として取り上げ、内的・外的亡命芸術大学長、芸術大学教授(パウマイスター、モホリ・ナギ、カール・ホーファー)が戦後芸術大学に何を遺し、何を託したか考察した。

2) シュトゥットガルト芸術アカデミーにみる改革的精神の地下水脈に関連し、)J・イッテン、ヴィリイ・パウマイスター、ヘルツェルが位置づけられ、改革的精神の地下水脈が考察された。)J・イッテンにみる改革的精神と芸術学校における造形表現教育の基礎付け、)パウマイスターに引き継がれたエチュード研究、)エチュードを支えた教育コンセプト。

イッテンの造形的作曲法思想とパウマイスターのそれとは必ずしも同一ではないが、両者の造形思考の基底には、体系から始めるのではなく、個々人の制作体験、空間の発生体験と探求活動を積み上げることにより、造形的作曲法の体験的理解を築き上げ、最終的には自己探求的な教育を目標とした教育プロセスを作り上げる、という視点の類似性がみられた。自己探求過程としてのこのプロセス性とその思想こそ、主要には1920年代から1930年代にかけてイッテンが基礎づけていく、造形芸術観・造形教育観の中核であったが、パウマイスターの改革提案にも同様の視点を見ることが出来る。

3) 筆者は先に共同研究「亡命芸術大学長・学校長達の戦後改革」に取り組み始めた時、資料を通して、亡命芸術大学長・学校長達の念頭にあったのは、戦後の再建が次世代の若者の潜在的諸能力を開かれた形で育む

ことにあったことが明らかとなった。彼らは、芸術学校・芸術大学の使命が次世代を開かれた国際的精神やヨーロッパ精神へと育むことにあることを深く省察し、そのような視点に立って将来展望を描いていたのである(社会的「将来構想」の教育的・教育学の次元)。

ナチズム時代の亡命者達によってもたらされ、育まれたものは、スマートな、ないしはラジカルなアジェンダではなく、経験知、論理、もの事を見る視点、世界観、人間観、社会観等々、それら総体に支えられた、現代の芸術理解、芸術大学改革理解であった。それは、ヨーロッパ大陸において一度見失われたヨーロッパの教育的・思想的遺産が長い苦難の年月を経て再獲得された、知的・文化的財産でもあった。

それらは、今後我々が次世代の社会を構想し、構築していく際に、絶えず必要不可欠なものとして問われてくる教育観であり、教育学の原点(「哲学」)でもあった。

論文、長谷川哲哉・鈴木幹雄「オスカー・シュレンマーの内的亡命期における漆芸術とその取組み(副題-略)」(H28年度研究成果)

[概要] 1)本論では、かつて改革芸術学校バウハウスの教授を務めた芸術家 O・シュレンマー(1888 - 1943)が 1933 年ナチスによる政権獲得直後に教職を追われた後、いかなる創作や研究活動を行ったか、研究しようとした。本論ではとりわけ、)彼が、1938 年以後生計のために雑多な仕事をして後に病のため 1943 年に死去(享年 54 歳)するまでの苦難の内的亡命期の後半期において行った、漆研究、漆芸術の取組みの概要、そして)そこから現代的な造形表現観を掘り起こした、注目すべき「モデュラシオン(絵画的空間の創出)」研究の成果、以上の二点について解明した。同取組みについては、わが国でこれまで全く解明されてこなかった。

2)内的亡命時代におけるシュレンマーの漆研究 / 1)シュレンマーの漆芸術との取組みは、工業都市ヴッパータールの漆工場主で化学者であったクルト・ヘルベルツ博士の保護のもと、1930 年代末に形成され大戦とともに終結した、漆絵を主要課題とする研究クライスの中で行われた。

)ヘルベルツからバウマイスターへの最初の委託は 1936 年。その仕事は当初漆工場の外壁画や窓ガラス絵の創作であった。1938 年には新たに同社の宣伝用カレンダー、古来の絵具の発達を系統説明図、現代の漆塗り戸棚扉絵の制作等々が加わった。

3)モデュラシオンの実際創作と研究 / 1)1941 年 10 月から 1942 年夏までシュレンマーは「漆キャビネット」の構想に取り組んだ。そしてシュレンマーは「漆キャビネット」によって、近代的工場において大量に生産された漆(ラッカー)から製造される絵具・塗料のもつ芸術的応用の豊かな可能性を印象深く、また全身体験的に訴えようとした。そして個々の漆絵パネル、すなわち多数の実験

的な漆板絵において、モデュラシオン(「平面を活気づけ、絵画的空間を創出する」ための方法)が試された。

)シュレンマーは、芸術の原理から説き起こすことによって、芸術としてのモデュラシオンを確立させようと図った。

シュレンマーはモデュラシオンの効果・作用を説いている。それは、「我々の想像力を活気づける。モデュラシオンによって平面ははっきりし、実体をもつようになり、有色のもの、有形のものとして感性的に捉えられるようになる」と。

結論 シュレンマーはナチズム時代、画家仲間バウマイスター等と共に、漆の芸術的可能性の開発に携わった。

その仕事は、当初は漆小箱や漆戸棚の装飾から始まり、次に漆キャビネットや舞台での漆衣装等の創作に展開し、その間に、研究仲間と共有の中心の問題となった「モデュラシオン」、すなわち現代絵画の技術面の中核点について実験的かつ理論的に研究した。

これまでわが国では、シュレンマーの晩年における業績について未知も同然であった。

論文、<南西ドイツ文学にみる国際的精神の諸潮流> についての研究

論文、清水光二「バーデン地方に関わる作家たちの戦中・戦後文学(副題-略)」(H26年度研究成果)

[概要] 研究書『亡命、反抗、内的亡命 1933 年～1945 年までのバーデン地方の作家たち』(1993)は、ドイツ南西部のバーデン地方に暮らしていた有名・無名の文筆家たちが、ナチが政権を取ってから終戦を迎えるまでの間に(1933 年 1945 年)、どのような体験をしたかをそれぞれ個人的に書き記したアンソロジーである。

本研究で、同アンソロジーに収められた執筆者のすべてを紹介することは困難であったが、本論テーマ、アルフレート・デーブリーンとの比較の関係もあり、戦時中アメリカに亡命し、戦後になってドイツに戻って来た二名の作家を紹介した。

論文、清水光二「マリー・ルイーゼ・カシュニッツにおける世界の断片化と語り手の「私」」(H28年度研究成果)

[概要] 1)マリー・ルイーゼ・カシュニッツは、1901 年 1 月 31 日、ドイツの南西部カールスルーエにて生まれた。プロイセンの将校であった父親の任地の関係で、幼少期から娘時代までをポツダムとベルリンで過ごした。1921 年、書店員見習いを開始。デッサウバウハウスにてシュレンマーの下演劇を学んだ後、1925 年、考古学者で美術史家のグイード・カシュニッツ=ヴァインベルクと結婚した。以後は夫の仕事の関係で、ローマ、ケーニヒスベルク、マールブルク、フランクフルト、再びローマと、次々に居住地を変える。同時にヨーロッパ各地をたびたび旅行し、1930 年代から詩や小説を書き始めた。第二次大戦中はフランクフルトで、ギリシャ神

話やグスタフ・クールベの伝記執筆に従事。1952年、再開されたドイツ考古学研究所の所長となった夫グイドと共にローマに滞在。1955年、ゲオルク・ビューヒナー賞を受賞。1974年、ローマにて死去。

経歴を通して、1901年に西南ドイツの一地方都市に生まれたカシュニッツが、20世紀という時代を、広くヨーロッパ全体に関わる視座から体験し、省察したことが分かる。

2) 一人称の「私」が語り手となって登場する、彼女の小説に、「でぶ」「幽霊」「わらしべ」「6月半ばの真昼どき」「道」「いつかあるとき」「作家稼業」「火中の足」「Xデー」「怪鳥ロック」「天使」などがある。詩においてもカシュニッツの場合、「私」の登場は他の詩人と比べて非常に目立っている。

カシュニッツは、その時その時において気付いたこと、大事だと思われたことを、ただ断片的に記録した。カシュニッツの場合、語り手の「私」は出来事を即物的に報告するだけの存在である。

今ここで大まかに近代の文学史を振り返れば、それは叙事的な物語が次第に困難になることを示す道のりであった。

3) カシュニッツは第二次大戦中ドイツに留まり、他の人々と共に戦争下の悲惨な現実を耐えてきたのであるが、その際同時にまた感じてしまう周囲との決定的な違和感・相違をどうすることもできなかった。戦争中、ギリシャ神話の再話やクールベの伝記執筆に没頭することで、カシュニッツは「灰色の現実から無時間性の中へと後退していった」。しかし、ギリシャ神話やクールベといった非ドイツ的なものに向けられた彼女の関心の方向からは、ナチスが支配する当時のドイツに対して内面的に抗おうとするカシュニッツの基本姿勢が見て取れる。

戦後まもなくカシュニッツは、ウルムから一通の手紙を受け取った。それは、白バラのメンバー、ゾフィーとハンス・ショル兄妹の姉、インゲ・アイヒャー・ショルからのものだった。そこには、ウルムの成人学校において彼女の詩の中から幾つかを朗読し、さらには「ヨーロッパ」というテーマで何か話してほしい、との依頼が記されていた。戦前、夫と共にヨーロッパ各地を旅行し、そこで暮らしたこともあるカシュニッツにとって、目の前のヨーロッパの分裂と破壊は耐えがたいものだったに違いない。1946年5月、彼女は戦争で破壊されたその町に向けて旅立った。

「私の兄弟とその友人たちは、兄弟のように結び付き、互いに補い合うヨーロッパへの深い憧れを持っていました。現代における経済及び技術の発展の観点から。それ以上に、文化面においても。…今現在ヨーロッパが憎しみで分裂しているにもかかわらず、私は今日こうした考えを呼び起こし育てていく必要があると考えています。…若者たちの間に。」ここに、文学史的にも社会・歴史的にも、もはや大きな「物語」が不可能となった

時代に、それでもあえてカシュニッツが行うしかなかった<ヨーロッパ再生への悲痛な願い・希求>を見ることが出来る。

5. 主な発表論文等

【雑誌論文】(計5件)

-鈴木幹雄、シュトゥットガルト芸術アカデミーにおける改革的伝統と改革的精神の射程：A・ヘルツェルの造形表現上の模索とヘルツェル学派にみる造形的思考研究を手掛かりに、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 8(2)、2015年、pp.25-39

-鈴木幹雄、アドルフ・ヘルツェルとシュトゥットガルト芸術アカデミー 内的改革コンセプトの形成、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、9(2)、2016年、pp.23-37

-長谷川哲哉・鈴木幹雄、オスカー・シュレンマーの晩年における漆芸術との取組み - 「モデュレイション」の作成とその思考を中心に -、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、10(2)、2017年、pp.43-56

-清水光二、バーデン地方に関わる作家たちの戦中・戦後文学 地方作家たちとアルフレート・デーブリーンの場合、吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系、(25)、2015年、pp.19-26

-清水光二、マリー・ルイーゼ・カシュニッツにおける世界の断片化と語り手の「私」、吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系、(27)、2017年、pp.55-64

【学会発表】(計1件)

鈴木幹雄、シュトゥットガルトにおけるアドルフ・ヘルツェルと20世紀造形的構築性コンセプトの誕生、第55回大学美術教育学会発表、2016.9.24、北海道教育大学(北海道)

【図書】(計2件)

-鈴木幹雄編著、風間書房、亡命芸術大学長達の芸術アカデミー改革、2014年、p.336

-鈴木幹雄著、内的・外的亡命ドイツ人芸術大学長達は戦後芸術大学に何を託したか シュトゥットガルト芸術アカデミーに見る改革的精神とその射程、小笠原道雄編著、福村出版、教育哲学の課題 「教育の知とは何か」 啓蒙・革新・実践、2015年、407(124-138)

【その他】

ホームページ等 該当事項無

6. 研究組織

(1) 研究代表者：鈴木幹雄 (MIKIO SUZUKI)
国立大学法人神戸大学人間発達環境学研究科(教授) / 研究者番号：70163003

(2) 研究分担者：清水光二 (KOUJI SHIMIZU)
吉備国際大学文化財学部(教授)
研究者番号：30226237

(3) 研究協力者：長谷川哲哉 (TETSUYA HASEGAWA)

和歌山大学(名誉教授)
研究者番号：50031810